

函館港



函館市港湾空港部

〒040-8666 函館市東雲町4-13

☎0138-21-3485

URL : https://www.city.hakodate.hokkaido.jp/soshiki/kouwan_dept/

1. 概況

〈沿革〉

函館港は北海道の南西部渡島半島の南端に位置し、太平洋と日本海とを結ぶ津軽海峡に面しており、本州と北海道とを結ぶ要衝の港として知られ、その形状から「巴港」または波が穏やかで船を繋ぐ必要もないことから「綱知らずの港」とも言われている天然の良港である。

古くから本州との交易に利用され、「新羅之記録」(江戸初期の松前藩による書)によれば、室町時代前期の箱館(明治2年「函館」に変更)では若狭(今の福井県西部)からの商船が年3回来ており、当時から蝦夷地の昆布は箱館を通じ、関西へ移出されていた。

嘉永7年(1854年)、来航したペリーと幕府との間で日米和親条約が締結され、安政2年(1855年)、箱館港は外国船の補給港として開港された。ペリーは条約締結後に調査のため箱館港に入港しているが、箱館港について「安全性という点では、世界で最もすばらしい港の一つ」と報告している。さらに、安政5年(1858年)の日米修好通商条約締結により安政6年(1859年)には外国貿易港として開港された。開港場となった箱館では、外国貿易が行われると共に、外国からの宗教、学問、文化が流入し、箱館の街は飛躍的に発展した。

明治期以降の函館は、港内および背後圏に造船業をはじめ各種産業が成長し、また漁業基地としても地位を固め、特に大正期から昭和戦前期にかけては北洋漁業基地として繁栄した。戦後は漁区が大きく制限され北洋漁業は縮小の一途をたどり拠点港としての役割を終え、代わりに現在の函館名物のスルメイカ漁を始めとした沿海漁業の拠点と変わっていった。

函館と青森間の航路は、明治6年(1873年)に開拓使によって開設され、明治41年(1908年)から昭和63年(1988年)まで国鉄が青函連絡船を運航した。その後、昭和39年(1964年)に函館～大間に民間による日本初の外洋フェリーの運航が開始され、昭和42年(1967年)、青森港との間にもフェリーが就航し、本州と北海道とを結ぶ物流の要衝となり、現在もフェリー貨物が本港の主要な取扱い貨物となっている。

昭和26年(1951年)に重要港湾に指定され、昭和28年(1953年)に函館市が港湾管理者となった。

〈函館港の整備〉

函館港の港湾整備は享和元年(1801年)から幕府および高田屋嘉兵衛により埋立が行われ、堀割と造船所が建設された

のが、はじまりとされている。その後、港の利用増加とともに港湾施設の整備が進み、幕末から明治初期にかけて、官・民により港内各所で倉庫用地や造船用地などの埋立造成が行われ、荷役施設として掘割や物揚場が建設された。

近代的な港湾整備としては、明治29年(1896年)からの第1期函館区営改良工事により外郭施設などの整備が行われたのをはじめ、各種事業により防波堤、国鉄青函連絡船施設、公共ふ頭、民間企業用地造成等着々と整備が行われている。

青函連絡船の廃止後は函館港の再開発が行われ、港町ふ頭においては、平成14年に水深14m岸壁、平成16年には水深12m岸壁が供用され、平成17年5月には外貿コンテナ航路(韓国・中国航路)が開設されており、これまで函館港での取扱いの無かったコンテナ貨物の取扱いが行われている。平成29年(2017年)には、北海道と本州を結ぶ大動脈であるフェリー機能の強化および、大規模地震発生時における復旧活動拠点として函館港において唯一の北ふ頭耐震強化岸壁が供用した。また、同年、臨港地区内の物流機能の向上を目的とし平成9年(1997年)に第1工区約2.7kmが開通した幹線臨港道路は、第2工区の約3.9kmが完成し、全面開通した。

〈現況と将来計画〉

函館港は、南北海道唯一の重要港湾である。平成30年(2018年)実績では全道取扱貨物量の15.5%にあたる3,223万トンの貨物を取り扱っており、南北海道の物流拠点としての役割のほか、本州～北海道間フェリーの発着場として国内全体の物流に多大な影響を持つ港である。加えてクルーズ船の寄港地としての人気が高く、また、歴史的な景観を生かしたウォーターフロントは多くの市民や観光客で賑わっている。

現在、函館港では平成17年4月改訂の港湾計画に基づき、「賑わいと親しみあふれる活力ある函館港」を目指しており、南北海道の物流拠点や、地域の特性を活かした国際的な水産・海洋に関する学術・研究拠点の形成、国際観光都市として賑わいと魅力あるウォーターフロントの整備などを進め、弁天地区においては、函館国際水産・海洋都市構想の中核施設となる国際水産海洋総合研究センターとの一体利用可能な岸壁整備が、若松地区においては、近年の増加傾向にあるクルーズ需要に対応するため、既存施設を活用した旅客船ふ頭の整備を進めている。

今後は、陸・海・空の交通の要衝といった本市の特性を生かし、国内はもとよりインバウンドの集客にも力を注ぎ、函館を拠点とした周遊観光の確立を目指す。